

シンポジウム「多職種連携教育の課題とシミュレーションの可能性」

多職種連携教育や医看薬融合教育の必要性は高い。しかし、多職種連携教育や医看薬融合教育において、倫理的問題、参加人数制限、教育空間確保が課題となる。

シミュレーション教育法は、医学教育で重視されるアクティブラーニングにも適合した教育方略である。シミュレーション教育法は、テクニカルスキルだけでなくノンテクニカルスキル養成が可能であり、多職種連携教育への応用が期待されている。

本シンポジウムでは、卒前卒後のシームレスな多職種連携教育を推進するために多職種連携教育の実践と課題に対するシミュレーションの可能性を模索したい。さらに多職種連携教育推進においては、カリキュラム編成、学習目標設定、事前学習などの課題がある。これらの解決のために多職種連携教育の実践者だけでなく、カリキュラムコーディネーター、医学教育理論、ICTの有効性も合わせて議論したい。

座長

大阪医科大学医学教育センター 駒澤伸泰

自治医科大学看護師特定行為研修センター 八木街子

演者

1 慈恵会医科大学 救急医学講座 万代康弘

岡山大学における IPE の現状と課題 卒後を中心に

2 大阪医科大学医学教育センター 藤原佐智

卒前多職種連携教育編成における E-manager の役割

3 岐阜大学医学教育開発研究センター 今福輪太郎

多職種連携教育導入に活用できる医学教育理論

4 自治医科大学情報センター 浅田義和

多職種連携教育導入への ICT の可能性

岡山大学における IPE の現状と課題 卒後を中心に

慈恵会医科大学 救急医学講座

万代康弘

医療現場は多職種が関わって成り立っている。そして医療安全・患者安全の観点からの問題が起きる事例は、単職種の問題より多職種での問題が多いことは知られている。そのような状況では単職種のトレーニングで解決を行うことがアウトカムに結び付くことは困難であり、多職種でトレーニングであることが理にかなっている。そして学習としては、実践に近い状況でのトレーニングであるシミュレーション教育が方略として効果的であると考えられる。多職種で成り立つ医療チームは、それぞれの専門スキルとともにコミュニケーションスキル、リーダーシップ、状況認識、意思決定などのノンテクニカルスキルが医療チームのパフォーマンスを発揮するための重要な要素になる。医療安全・患者安全に関わるヒューマンエラーとしてノンテクニカルスキルが重要な要素であるため、それら要素をトレーニング目標とした現場改善アプローチとして講義形式ではなくシミュレーショントレーニングは有効であり、また既に医療現場で働いているスタッフでは現場に近い状況でチームとして行動してみることから振り返りを得るシミュレーショントレーニングは理にかなっていると思われる。岡山大学で取り組んだ2つの企画についてご紹介する。

①地域医療現場での多職種連携トレーニング開発

この取り組みは岡山の新見市と岡山大学が連携して行っている取り組みである。地域医療現場では医療スタッフ不足が常態化しているところも少なくなく、他の職種が患者急変時に居合わせることも少なくない。初期対応を行いつつ医師に報告、引き継いでいく場合があり得る。その場合の対応トレーニングとしてシミュレーションプログラム開発を行った。この取り組みのポイントとして、地域医療機関でのニーズの把握、他職種指導者を交えた事前準備にある。

②薬剤師シミュレーショントレーニング開発

病棟薬剤師や訪問薬剤師として患者と接する場面が増加する薬剤師のニーズからシミュレーショントレーニング開発を行った。薬剤師の臨床現場での主な役割は服薬指導やバイタルサインのチェックや患者の状態を把握するための情報収集、簡単なフィジカルアセスメントである。服薬の把握や、服薬に関する患者からの情報、有害事象のチェックなど薬剤師としての役割は増えてきている。医療安全・患者安全を保つうえで臨床薬剤師の役割は重要である。この取り組みのポイントは薬剤師が医師の協力の上でトレーニング内容を作成・企画し、トレーニングの指導者も薬剤師が行っていることである。トレーニング内容は患者からの情報収集と患者の状態把握、他の医療スタッフへの報告、初期対応である。

以上2つの取り組みを中心に卒後の医療現場に携わる多職種連携教育としてのシミュレーショントレーニングの要点や課題について議論を行いたいと考えている。

卒前多職種連携教育編成における E-manager の役割

大阪医科大学医学教育センター

藤原佐智 駒澤伸泰 中野隆史 寺崎文生 河田了

激変する医療環境の中で医療の質と安全を担保するためには、多職種協働に基づいた良質なチーム医療が必要である。卒後の円滑な多職種協働推進のためには、卒前の多職種連携教育が必要不可欠である。しかし、多職種連携教育導入では、倫理的問題、参加人数制限、教育空間確保が課題となる。

本学は 2021 年 4 月に大阪医科薬科大学として、医学部、看護学部、薬学部による医療系総合大学となる。新入生歓迎合宿では、現在医看合同で行っている合同グループワークの 3 学部への拡大を計画している。多職種連携を意識した授業として、1 年次の「医療人マインド」や 2 年次の「専門職連携医療論」がある。1 年次の医療人マインドは、各職種の役割や「やりがい」を知ることで、自らの職種について考えるキャリアデザインに関する意識を芽生えさせ、他職種を尊重するスキル涵養を目指している。そして、医学概論や医療倫理などの科目履修の中で、自らの在り方や連携についての省察を深める。現在、中学年における医療倫理に関する合同 PBL を検討しており、その場で多学部の観点からの倫理的省察能力を涵養する。高学年では、臨床実習における合同カンファレンス等を行い、実際の医療現場での多職種協働を目指している。そして、総括として医療安全事例検討を活用した最終学年での「多職種融合（連携）ゼミ」が行われている。

本講演では、このような IPE 推進における E-manager の意義について考察したい。

多職種連携教育導入に活用できる医学教育理論

岐阜大学医学教育開発研究センター

今福輪太郎

社会の複雑化や多様性に 대응するために、多職種連携（IPW）による包括的な保健医療福祉サービス提供の重要性が高まり、卒前および卒後医療者教育においては多職種連携教育（IPE）の開発・導入が推進されている。しかしながら、理論や教育モデルを基盤に開発され評価・検証された IPE プログラムは決して多くはないという報告もある。理論は、事象を合理的に解釈するための枠組みであり、IPE の開発や評価のための「ロードマップ」や「レンズ」を提供するとされる。つまり、理論は、これまで経験的に実践してきた教育を客観的・批判的に見つめなおし、再認識、再構築するためのツールとしての役割を担う。一方で、IPE/IPW に関連する理論は、教育学、心理学、社会学、経営学など分野が多岐にわたるため、どのような理論をいつどのように活用したらいいのか迷う人も多いただろう。本発表では、「IPE と理論」をまとめた先行文献（春田，2014；Hean et al.，2018，Sargeant，2009）をもとに、行動主義や構成主義、社会構成主義という教育のパラダイム別に理論を整理し、それらがどのように IPE に援用されるのかを考察する。例えば、学習はすべて観察可能な行動変化にあるとする「行動主義」の考え方では、学習成果としてのコンピテンシーの同定に寄与する。また、個の認知プロセスに着目する「(認知的) 構成主義」では、経験学習や発達理論、変容学習などがあり、個々の学びの促しに有用である。学習環境や他者との関わりに着目する「社会構成主義」では、社会文化理論や状況論、協働学習の理論、実践共同体、活動理論などがあり、チームや組織としての学びの促しに有用かもしれない。その他にも社会学や心理学分野では、チームや対人関係構築過程に着目した接触仮説やタックマンモデル、集団間行動や心理に関わる社会的アイデンティ理論などがあり、それらも IPE の開発や評価に活用できるかもしれない。今後は、様々な専門職の学習者が共に学ぶ複雑な IPE の文脈において、複数の理論を基盤にして教育を設計、実践、評価することも求められるだろう。

多職種連携教育導入へのICTの可能性

自治医科大学 情報センター IR 部門 / 日本ムードル協会 会長

浅田義和

昨今ではICTを使った教育が様々な場面で増加しています。特に新型コロナウイルスの感染拡大にともない、同時双方向型・オンデマンド型を問わず、遠隔教育の需要が広がってきていることも、その一例と言えるでしょう。

多職種連携教育（IPE）という視点からICTの活用を考える場合、大きく分けて「教育前」「教育中」「教育後」の3つの場面での使い方が考えられます。

1つめの「教育前」は授業でいえば予習・事前課題にあたる部分です。当然ながら「多職種」との連携を行うには、その職種についてもよく知っておく必要があります。このような知識に該当する部分は、いわゆる反転授業のように、事前で動画教材を見ておくなどの方策が浮かびます。また、VRやARを用いて、その職種を仮想体験する、なども考えられるでしょう。

2つめの「教育中」は、主に集合で行う授業・研修そのものを想定しています。シミュレーション教育が最も生きる場面はここになるでしょう。一方、緊急事態宣言などで一堂に会して学ぶことが困難な場合でも、オンライン会議システム等を用いて同期的につながるができる環境を作り出せば、コミュニケーション等の教育はある程度可能になります。この場合、実際に医療が行われる「場」をシミュレーションすることは困難ではありますが、ICT活用の一つの可能性としては検討できることでしょう。

3つめの「教育後」は、復習、あるいは授業での課題提出のような場面です。当日の動画やグループワークの成果物を振り返る、レポート課題を提出させる、という従来の形式のほか、LMSなどを用いて非同期的に継続的なディスカッション、意見交換・情報共有を行う場を提供することが可能になります。また、オンライン会議システムで改めて学習者同士がつながり、コミュニケーションの場を練習する、あるいは録音・録画させて提出してもらってフィードバックする、などの応用も可能になってくることでしょう。

本講演では、これらの3つ場面を整理するとともに、今後のICT活用への展望などをみなさんと一緒に考えていければと思います。